

女 郎 考 追 記

かつて多少はかぶきもみたころのこと、白浪物のうちでは三人吉三がやはり一番たのしめるだしものであった。ことばを職とするものとして、あの「お嬢」の《おじょう》といふことばもせんざくしてみたいと、かねて、おもったものである。まづ、わたくしのうたがったのは、《おじょう》のかたちそのものは、語源はすぐにわからないにしても、なにかもとがあつて、それから派生した俗語であつて、嬢の字の方は、単なるあて字なのではなからうかといふことであつた。そして、漢字としてみれば、嬢と娘とは、まったくおなじ字なのであるから、このうちからとくに嬢のかたちをえらんだのは、シナの稗史小説のたぐひになじんでゐた江戸の文人たちであらうと想像してみてゐた。ところで、この、文字の方の問題はなかなかやっかいで、いまだ歴史をたどつての研究をとげてゐないが、ただ、嬢の字があて字であらうといふ推測は、偶然に視野にはいつてきたわづかの方言の資料をいとぐちとしてほぐれていったので、そのご疑問をうらづけてみる事ができた。そこで、《おじょう》そのものは、これで一往、わたくしとしてはとけたわけであつたが、ここにあらたにわたくしの興味

をひいたのは、じつは《お(お)じょう(さん)》と《じょう》とが語源的雙生語——doublets——であるといふ新規な言語史的事実であつた。わたくしは、教室で語源的雙生語の現象をとくばあひsecond-handでない実例として、これを一枚くはへてゐた。つまり、このことについては、まだ、たれもふれてゐないつもりである。ところが、そのことなら、もう柳田さんの「毎日の言葉」のうち「女の名」に書いてあると阪倉篤義君からあるはなしのまぎれに教示をうけた。うっかり、わたくしのくだくだしいはなしを、——「言語と文芸」誌上において中田祝夫君たち頭脳明敏な教育大学の面々がくだされた判定にしたがへば、「まことに驚き入つたる悪文」を——書かずによかつた、阪倉君に感謝しつゝ、「毎日の言葉」からつぎにその粹を引用することとする。事実に対する想定が歴史的に、全部、精確にあたつてゐるとはいへないが、さすがにうつくしい文章であるとおもふ、あへて螻蛄が隆車に斧をふりかざすのおろかしきまねはずまい。

「上臈といふ語の意味は、文献の上に出て来るものと、民間の口語とで少しばかりちがつて居た。是をたゞ身分の高い家の婦人と解する以上に、長い袖を垂れ袂の裾を引いて労働を事とせず、胭脂白粉を以て化粧した人といふ風に取るやうになつて、都会や港場では飛んでも無い女たちが、此名称を独占する傾きを生じた。たとへ文字は全く異なつたものを用ふるやうとも、彼等と似通つた名を以て、もう世の常の良家の女性を呼ぶことは出来ない。それで一段と早目に此言葉は、いはゆる標準語から消え去つたのである。……」

そして、種々の方言にあらはれるいろいろのかたちを比較してのべてゆくうちに、つぎのやうなこともみえてゐる。

「江戸で大に行はれ、又標準語ともなつたオジウサマなども、やはり上臈の系統に属するもので、元は必しも所謂合嬢のみに限らなかつたことが、期ういふ比較によつて判つて来るのである。」(以上、「女の名」第三節、「上臈」より)

x x x

わたくしは、《おじょうさん》の語源をたどることには、いなそれを書いてみることに、一己のきもちとしては、興味をうしなつてゐるわけであるが、結果として《おじょうさん》と《じょうろ》とが語源的にふたごであるといふことと、譬喩的にふたごとはいつても、系譜のうへで二つのかたちがどのやうにわかれ、どのやうに発達したものかとは、これまた、別問題で、そこにはまだ、いろいろきはめてみなければならぬことがひそんでゐる。一方では《おじょうろ》という最近までつかはれたくるわのことはとの語史的なかはりあひの問題、他方では、ふるくあのお夏清十郎のお夏が《お夏女郎》とよばれたばあひなどの固有名にそへてつかはれたばあひの《女郎》が一種の語末のかたち——*fin des mots*——としていかに動搖し、それがどのやうな影響を獨立してのかたちの用法におよぼしたかの問題があるのである。

また、一方では加賀の千代女などといふばあひの《一女》のかたちそのものの性質、他方では、これと、こんにちでは《miss》の翻譯として意識される《嬢》のかたちとのあひだになにの脈絡もないか、といつた問題。

はなしをすこし隨筆風にはこぶことをゆるされるならば、わたくしども夫婦のなかうどをしてくださつた某夫人は、もと、なかでそだつたひとで、——むすめのころに、泉鏡花にたいへんかわいがられたなどの文学史的にはもつとおもしろいはなしが多いのだが——あるとき、こんなはなしをきいたのをおぼえてゐる。こどもさんをつれてお里へあそびにかへると、おいらんたちがこどもさんたちをかわいがってくれる、それに対して、こどもさんたちは、おいらんたちをおよめさんおよめさんとよんでなつたといふのである。お茶屋からおくられてゆく風習ものこつてゐたはずのいまだ戦争まへのはなしである。このはなしにわたくしがわたくしなりの興味を感じるのはいな、いま興味をもつてこのはなしをおもひだすのは、くるわがじつさいにどんな世界であつたにせよ、素朴なこどものころに映じたおいらんのすがたである。

べつにここから飛躍して、花嫁を《はなじょうろ》とよぶ方言のかたちの成立の心理の説明までこみようとするつもりなどはないし、そんな説明をするなら、それはうそになる。しかし、かういふ風なことはいひうるのではないであらうか。くるわのそとからながめるならば売笑婦とよびうるいやしい職業のをんなであつても、近世封建社会における特殊な歴史の伝統を背景にもつくるわのなかでの、遊蕩を肯定しての、ある人情を基盤にして成立した人間関係においては、かりそめのひとよつまこそ官能美の権化として人はだの女神であつたにちがひない。そのやうな幻想の心理を背景として展開される遊蕩の世界でかのをんなたちが愛称のことばではばれたにしても、それはふしぎではない。これに対応

させて、自分たちを生きた人形にしあげてゐるある生活の伝統を封建社会の風俗の意識へさかのぼらせて想像してみるときは、それは、こどもが素朴にかの女たちをおよめさんとよんだ心理とさへ、それほどとはいへないとおもはれる。封建社会がずつとつゞいてゐて、したがってそのやうな社会と時代との意識のうち人間がいまも任んでゐると仮定してみるならば、われわれはいま目のまへでくるわの女たちが、しだいにあらたに《おじょうさん》といひかへられてゆく現象に接するかもしれない。ただし、このやうな想像をのべたのは、いまは、《おじょうさん》といふ語についてかたるためではなく、くるわといふものへの意識の変遷をある程度考慮しなければ、結局は、《女郎》といふ語がみづからにやどしてゐた価値の推移もとらへがたいであらうといふことのためである。もとより、「女郎考」は、そこまでふでをのばして論じようとするものではない。いふまでもなく、あれそのものは、《上臈》から《女郎》への形態の系譜をことばを職とするものたちばからのべたものにすぎない。

ちなみに、ひとこと《おじょうさん》にもどる。これについて、わたくしは直接に知つてゐる異形には《じょうや》のよびかけ（かたちのうへでは、《ほうや》の対）と、《じょうちゃん》（《ほっちゃん》の対）とがある。いまは、もはや耳にしがたいかたちであるから、これも、のちになれば資料的価値をもつてもあらうかと書きとめておくのである。《しよっちゃん》は、きつすいの江戸っ子のことばである。それから、《令嬢》。これは、明治の文明開化のうまれであらうといふ気がするが、そこまで資料につい

てわたくしはしらべてゐない。近世語の専門家にたしかところを教示ねがへればしあはせである。

さきに「女郎考」を書いたさい、材料が不十分であつたばかりでなく、そこまで書くと、わたくし流の文章がますますすちのこみいったものとなるのをわたくし自身とつて、原稿で抹消した部分がある。それは、文字は所詮ことばの幻影でしかないといふふくみからすれば、過渡期の段階においては、文字には上郎と書いても、これがジョローのかたちをさう書いたものでなかつたといへず、また女郎と書いてさへ、一旦、このやうな書きかたが成立したのちには、これがジョローのかたちをさう書いたものでなかつたともいへないといふことであつた。このやうな面から問題をはなれようとした意図は、できるだけいろいろな角度から現象を連続の相でとらへてみたいと考へたところにあつたのである。上述のごとく、材料は、不十分であるばかりでなく、ある点では十分にそれが適切な例であるとも考へがたいのであるが、いまはとにかく材料があることだけをしめしておく。

一、女郎と書いてジョローとよませてゐる例

「性次記咄大鑑・白」の「第一」は「吉原女郎のみたて」と題するが、この「女郎」にながづけして「ちようらう」とある。ちなみに、この本文には、《上郎》のかたちが一度、《女郎》のかたちが二度あらはれるが、これには、いづれも、かなづけがない。しかし、上郎としたり、女郎としたりしてゐるのも、これは、文字のうへでの動揺で、それらのよみかたとして作者の期待してゐ

るのは、ジョーローの方のかたちであるかもしれない。元祿時代の文献は多いことゆゑ、注意すれば、このやうに女郎と書いてジョーローとよませてゐる例はまだ、いくらもあることかとおもふ。なほ、さきに「女郎考」に引いた「しづ団返答」は、その議論のはこびに少々もたつてゐるところがあるものの、結局のところ、そこで「おおく女郎」の《女郎》が論戦のたねとなつたのは、これを《ジョーロー》とよまなければならぬところにあるわけである。

二、上らうと書いてもジョーローとよんだかの例

寛文四年（一六六四）刊の「糸竹初心集」の中巻に、「おか崎さき」と題する左の俗謡を収める。

おかさきしよろしゆうおかさきしよろしゆうおかさきしよろしゆうはゑい上らうしゆうおかさき上らうしゆうはゑい上らうしゆう

これは琴うたであつて、原本には、琴の譜がついてゐる。それによつて判断するときは、「しよろう」とあるものも、「上らう」とあるものも、譜のうへでは、「しよろ」とおなじである。「上らうしゆう」と「上らうしゆう」のばあひは、ちがつてゐる。すでに寛文年間《ジョロ》といふかたちが一般におこなはれてゐたか、さうではなくて、それは単に俗謡のうへにおける特殊な短縮形であつたかは、みぎの例だけからではなんともきめがたい。しかし、その点はしばらくあづかることとして、「上郎」なり「上らう」なりの文字が《ジョロー》とよまれたであらうことは、この糸竹初心集の例をもつても間接には推定できる。すなはち、われわれには、すでに二つの条件があたへられてゐる。(I)す

で寛文年間には《ジョロー》のかたちが口語において確立されてゐた（さうでなければ、「女郎」といふ文字の慣用は考へられない）。(II)ただし、とにかく文字の伝統においては、「上郎」とか「上らう」とか書く習慣もすたれずに「女郎」と書くあたらしい慣用と平行しておこなはれてゐた（語形態の音相いかんを別にしていへば、一つ文脈において二様の文字がつかはれる例のあることは、二様の文字形態が一つの語に参照するものであることの証拠である）。このやうな条件をふまへて考へるならば、糸竹初心集にみえるところの《ジョロ》に対応する「上らう」の文字は、これが直接にここでは《ジョロー》のかたちに対応してゐなくても、《ジョロー》のかたちを文字においてそのやうに書く慣用があつて、それで《ジョロ》にもあてられたものと推定してみる方が、俗謡をしるしたために文字とそれのあらはす語形態の音相とのあひだにおこつた特異なくちちがひとしてそれをみるより、解釈として自然ではなからうか。

なほ、糸竹初心集の例から、当時すでに《ジョロ》の短縮形が一般におこなはれてゐたかどうかを推定することのゆるぎないことは、上述のとほりであるが、たとへば確な証拠とはいひがたくとも、ジョロのかたちの存在を肯定しうであらう。旁証はある。すなはち、すくなくとも「お夏女郎」などといったばあひの固有名にそへるばあひの《女郎》では《ジョロ》の異形がおこなはれてゐたのではなからうか。つまり、口語のうへでは《ジョロ》のかたちも発生してゐたのではなからうか。すでに「女郎考」においてあげた、たとへば、玉海集の句「撫子のもりかや露のお玉

女郎」の「お玉女郎」は、これをなんとよんだか正確にはわからないが、五・七・五の音数律にしたがったものとして常識的に解釈すれば「オタマジョロ」のかたちが期待されるわけである。

さらに、ついでをもつて、追記として一言するならば、かの日ボ辞書では、後世の女郎ぐもにあたるかたちを、かながきすれば《ジャウログモ》と醜写すべきかたちで掲げてある。さきに「女郎考」では、これについて、このかたち——すなはち、一往われわれの期待をうらぎったかたち——も決して印刷の誤植とのみは考へられないむねをのべておいた。それは、《じゃうらう》の語形が動搖をはじめた初期の段階に対しては、《ジャウロ》のかたちの発生をまづ推定すべきではないかと考へてのことである。このやうな短縮の蓋然性に対する推定そのものは、「女郎考」においてすでに述べたので、ここにくりかへすことはしない。

○

《ジョロー》のかたちは江戸時代の初期に成立し、また、このかたちは、内裏上臈などの上臈へも官能の世界の女王である遊君へもともに言及することはであつたらうこと、これは、「女郎考」で推定したごとくである。ここには、遊君を《ジョロー》のかたちでよんでゐる確実な過渡期の例をおぎなつておく。すなはち、酒戦を題材として有名なかの「水鳥記」(上)の「樽次道行の事」につきのやうなくだりがある。

かやうに申(し)つゝ、いろ／＼のめいしゆを、遊君に、しやくをとらせてぞ出しける。もとよりこの、ぢやうらう。しな川の。はまそぢぢなれば。しなじに。しほのあるは。だ

うり。……(アト、女ノ容姿ヲ讚美スル文章)

みぎの引用は、寛文七年の京板によるものであるが、こゝにみえる「ぢやうらう」を松会板の方では「上らう」としてゐる。また、京板にも、あとに、もいちどみえる例については、「上らう」の書きかたをとつてゐる。

さすが上らうも。岩木ならねば。はやうちしほれたるふぜいにて。今はなにをかつむべき。そもみづからと申すは。此(の)品川しながはに。ながれを。たつるものなれば。かみよりくだる人も。いなかよりのほれるも。やなぎはみどり。花はくれなゐのいろ／＼と寵愛して……

文体のことばでいへば、こゝに「上らう」のかたちの方があらはれるのは、この作品の、あるいはおしひろげていって、いはゆるかな草子の、その特徴ないしは限界を、おのづからに、しめすものと解釈しうる。いな、文体を問題にするからには作者の意図というものをここにはへて考へて、作者が——意識的にせよ無意識的にせよ——「上らう」の方のかたちをそこに積極的にえらんでゐるといふ風にもみるべきである。したがって、さういふ風にもみるかぎり、そのえらばれたのは、この方がことばとしてかたいからであつたらうといふ推定がなりたつ。もとより、どのくらいかたいかを反省してみる段になれば、当時とても、その判断はかなり個人的主観的なものたるをまぬかれがたかつたかもしれないが、それはとにかくも、——他面、うへの推定をうらからいへば——そこに「上らう」とつかつてあるからとて、すくなくこれをもつてただちにそれがそれだけ遊君に、直接、敬意をあらはつての

表現であるとするやうな見方はそこからみちひかない方が安全である。敬語に関する術語を援用していへば、それは、このばあひ、《鄭寧》の表現にすぎないものとみるべきである。つまり、さういふ線でわたくしはみぎの水鳥記の表現をよんでゐる。

○ 遊君でない方の《女郎》の例をどこまでさかのぼらせることができるかについては、さきに「女郎考」にしろしたやうに、しかるべきことをのべうるだけの材料がない。たゞ、「女郎考」を書いたときにはつかはなかつたが、わたくし自身がしらべてゐない材料なら、ここに、ひとつある。問題とするのは、「おとぎ草子」の「物くさ太郎」のつぎの個所である。

（物くさ太郎）縁の下よりおどりいで、「いかにや女房、わがせゆへに心をつくし、ほねをはをるぞ」とて、縁の上へあがりける。をみなへし是をきき、きも心もうせはてて……（日本古典文学大系本、ペイシ一九九参照。）

みぎの「をみなへし」は、文脈からすると、作品の女主人公なる侍従の局にあたることばなのである。この「をみなへし」が上野図書館蔵の奈良絵本には「女らう」とあるよして、これなら、たしかにふるい本文に「女郎」とあつたのを「女郎花」とあやまつたかの推定も可能である（以上、上引の大系本の頭注にしたがつてゐる）。もとより、作品の問題として考へてみるときは、なぜ、板本の「物くさ太郎」に「をみなへし」とあらはれるかについては、いろいろの推定も可能で、したがって、これを考へてみることは、またそれなりに、わたくしとしても、おもしろいとお

もふけれども、それはそれとして、ここでひとつ確実な事実はずでに奈良絵本に、ふつうならわれわれの期待するかたち「上郎（上臈）」を「女郎」としてゐるといふことである。概括的なみかたにおいていふと、わたくしは奈良絵本の成立と流行とをわりにひきさげて考へてゐるものであるが、それにしても、奈良絵本に「女らう」の例がみえるといふことは、やはり、注目すべきである。

○ 以上だけでも「女郎考」の追記としてはやゝながく書きすぎたきらひがあるかとおもふが、もとをいへば、そもそも「女郎考」そのものがコリアードの懺悔録の驪字の新刊紹介を執筆したをり、べつに、もすこしくはしくとりあつかひたいと考へてのこしておいた問題を展開したものにすぎない。じつは、大塚氏のすぐれた驪字は、まことにみごとなできばえであるが、《ジャウラウマチ》にあたるローマ字を「女郎町」と驪字してゐるのは、あるいは、一番いかがかとおもはれる点であつた。直接には、これが「女郎考」の執筆の動機になつたのである。ただ、大塚氏のあやまりに言及しなかつたのは、その方が、すでに新刊紹介のある以上、ゆかしいとおもつたからであるが、一往、拙文をむすぶにあつては、やはりみぎのこともしるしておくことにした。わたくしが懺悔録の《ジャウラウマチ》の驪字のことをつねに問題にしたつ「女郎考」の筆をすすめていった趣旨が、さうでないといふ十分にあきらかにならないことがわかつたからである。